

高等学校における宗教教育の実践例

—宗教情操涵養に関する一考察—

近 藤 辰 巳

<はじめに>⁽¹⁾

戦後の公教育⁽²⁾においては宗教教育⁽³⁾が禁止されている。しかし、そのような宗教教育の禁止と、経済高度成長期におけるプラグマティズム的発想とのもとに我々にはあまりにも宗教を遠ざけすぎたのではないだろうか。理性的な存在である人間にとって必要であろうさまざまな宗教的情操⁽⁴⁾も同時に排除してしまったのではないだろうか。その結果、ある特定の宗教に執着するのとはまったく次元の異なる、「慈しみの心」であるとか、「感謝の心」であるとか、あるいは「非日常的なものに対する畏敬の念」なるものまで、我々の内面において希薄なものになりつつあり、また、宗教に無関心であることが当たり前のような状況になっているのではないだろうか。そして、この宗教に対する無関心は、ある場合には宗教的なものに対する無条件な拒絶を生み、ある場合には宗教的なものに対する無菌状態を生み出し、ある宗教に対する判断無き没入へと導くこともある。

人は、聖なるもの⁽⁵⁾とのかかわりを絶えず持ちつづけてきた。自然を畏れ、神に祈り、崇高なるものに頭を垂れ、清らかなるものを好み、穢れたものを忌み嫌ってきた。そして、聖なるものとかかわりの中で、俗なる自分たちの無力を感じるとともに、聖なるものに対してさまざまな働きかけをしつつ、人間らしさのようなものを保ってきたのではないだろうか。しかし、聖なるものとかかわりの一つの顕れであろうある特定の教義なるものが政治に利用された場合、あるいは、聖なるものとかかわりが何らかの力によって一切否定された場合に人類は悲惨な経験をしてきたように思えてならない。

政教分離から七十余年が経ち、昨今の社会情勢の中で起こりつつある、人間の情操が原因と思われるさまざまな事象を目の当りにして、今新たに宗教的情操教

育、あるいは、宗教教育そのものの必要性を実感せざるを得ない。人が聖なるものと如何にかかわってきたか、あるいは、如何にかかわるべきかを考えることは、排除さるべき宗教教育にはあたらないと考える。そこで、筆者は、宗教教育の目的を聖なるものとのかかわり方の再認識ととらえたい。

宗教教育の目的を聖なるものとのかかわり方の再認識ととらえる以上、ある特定の宗教（仮に複数の宗教を扱うにしても）の教義の解説に終わってしまったはその目的達成は困難である。先にも述べたが、現代の人々には、宗教と聞くと無条件に拒絶する傾向と、一方、少数ではあるが、ある特定の宗教に対して判断の少ないまま没入する傾向が見うけられる。そのような状況の中で、ある教義をとうとうと述べたところで何も生みだされないことは十分に予測できる。従って、ここでは教義の解説は二次的なものとする。彼らにはそれを受け入れる準備ができていないからである。まずは、彼らの宗教に対する無条件な拒絶、および、判断無き没入からの回避が達成されねばならない。

本稿は上記のような筆者私見に基づいて、2006年度に勤務校である東海高等学校において、1年生の「総合の時間」に行った、「宗教」の授業10時限分（1時限は50分）の講義実践例の紹介である。⁽⁶⁾

<第1限・宗教>

【目的】

本時限においては、宗教に対する我々の態度を確認することを主な目的とする。

【導入】

まず、『宗教』から連想することを、五つ程度、自由に発表しなさい」というオーダーを出し、寄せられた回答を、何かしら宗教に対して「否定的」なイメージを持っていると思われる発言、「肯定的」なイメージを持っていると思われる発言、「その他」の発言の三つに分類してみる。

〔否定的〕

戦争、詐欺、犯罪、近寄りたくない、紛争、狂信、洗脳、暗い、うさんくさい、怪しい、危険、貧困、怖い、生理的拒絶

〔肯定的〕

勇気を与える、安心感を与える、理想、行動規範、支え

〔その他〕

断食、教え、静か、終着点、哲学、道徳、神話、冠婚葬祭、教育、本質、神聖、音楽、敬う、祈り、儀式、分派、信仰、救済、集団、法然、仏陀、坐禅、さとり、お経、念仏、釈迦、慈悲、寺、写経、数珠、ヒンドゥー教、ジャイナ教、イスラエル、キリスト教、神、中東、十字架、ユダヤ教

少し説明を加えると、否定的なものは、かなりの部分で複数の生徒による支持を得ているのに対し、肯定的なものはたった二人の生徒による発言であり重複発言はなかった。つまり彼らは、宗教に対して圧倒的に「否定的な」イメージを持っていることがわかる。

【展開①】

人間が何よって特徴付けられるかを、ホモ・サピエンス、ホモ・ファーベル、ホモ・ルーデンスなどの例を挙げて紹介する。その中に、エリアーデが定義したホモ・レリオスも含まれることを示し、以下のような教科書などによる解説を提示する。

人間の力や理性の理解を超えた存在に対する信仰や畏敬の念なども人間特有のものである。

霊や魂の存在について考えようとした人間の本性や信仰心に注目した定義⁽⁷⁾

ここでは、畏怖さるべきもの、恐ろしいもの、崇高なるもの、美しいものなどに対して、信仰心を持ったり、畏敬の念をもったり、あるいは避けようとしたりするという認識が、生徒と共有されることが期待される。死を恐れるとか、高くそびえる山々に何かしらの力を感じるとか、初日の出を拝むとかを例示することによって、大方の生徒からは同意が得られる。つまり、自分たちと、宗教的なものが無関係ではないという認識がある程度は共有できるようになる。

それでも無関係を標榜する生徒に対しては、「注連縄が巻いてある木に小水がかけられるか？」という質問が効果的である。「それはできません」と答えた生徒に、さらにその理由を尋ねると、彼らは「何か悪い事が起こりそう」とか、「祟りがありそうだから」という返答をする。この瞬間、彼らは、宗教的なものと無関係ではいられないことに気づくことになる。

【展開②】

導入での回答からも明らかなように、彼らにとって「宗教」とは、誰かの教え、具体的には、仏教・キリスト教・イスラームあたりをイメージしている場合が多い。ところが、先にみた、神木の例は、それらの「宗教」とは一線を画している。しかし、彼は、注連縄が巻かれた大木が、自分の能力が遠く及ばないもの何かしらの不気味な力を有していることを感じて、「とどまる」という行為をしたのである。我々は、この行為が「宗教」に関わるものと考えたいのである。

今ここで、エリアーデがそうしたように畏怖さるべきもの、恐ろしいもの、崇高なるものなどを便宜上「聖なるもの」と呼ぶことにする。その上で、先に示した神木の例を念頭に、宗教を定義してみると、次のようになろう。宗教とは、「聖なるもの」と自らの間にあるなんらかの差を意識した上での、目的達成のための行為である（神木との力の差を意識し、崇られないように、小便をやめたのである）。生徒には、ここで「宗教」が広狭の二通りに定義されるべきことを提示したい。

【狭義】＝だれかの教え、信仰さるべき教え

＊例：キリスト教・仏教・イスラーム・ヒンドゥー教・神道

【広義】＝聖なるものとの落差を意識した、合目的的行為

＊例：注連縄がまいてある大木に小水をかけるのをやめた。

【まとめ】

「我々は、狭義の宗教と無関係であることは可能かもしれないが、広義の宗教と無関係であることは困難である。」という、認識が共有できれば、本時限のおおよその目的は達成されたと考えられる⁽⁸⁾。

<第2限・浄と不浄>

【目的】

第1限で、宗教的なものと無関係であることの困難さについて、共通の認識を持った上で、日常的な感覚と、非日常的な感覚についての考察に進む。

本時限の目的は、我々が、非日常的な「清浄・不浄」の概念の影響を少なからず受けていることを再認識することである。

【導入】

日常的な「清潔と不潔」と非日常的な「清浄と不浄」について生徒のもつイメージを発表させてみる。その結果をまとめてみると、以下のようである。

【清潔】：手がきれい、髪の毛がきれい、爪が短い、部屋の掃除が完璧、他多数

【不潔】：手が汚い、フケが多い、爪が汚い、部屋が散らかっている、他多数

【清浄】：清めの水や塩、滝、沐浴、神聖な川の流れ、ガンジス川

【不浄】：穢れ、血、ムスリムにとってのブタ

ここでは、「清浄と不浄」に関する回答数が、「清潔・不潔」に関する問いへの回答に対してかなり少なかったことを指摘しておきたい。この回答数の少なさが、彼らが宗教的なものから遠ざかった日常を送っている証拠とも考えられるからである。

【展開①】

以下に、回答されたものが、何故清浄（あるいは不浄）なのかを、検証してゆく。

まず、清浄さをイメージする場合に、「水」が多く回答されていることに気づく。但し、この「水」は、単なる「水」ではなく、特殊な「水」である。神聖な山の奥に流れを発し、数メートルの滝を落ちてくる水であったり、天から下り、天へ帰るガンジス川の流れであったり、龍の口から流れ出る清めの水道水であったりであることの確認が必要である。その上で、ガンジス川を例に、その不衛生さと、同じ川がもつ聖性を検証してみる。

【ガンジス川の汚染状況の説明】

「本事業の対象地であるインド北部に位置するウッタル・プラデシュ州バラナシ市（人口約百三十万人）はインドで最も聖なる川として崇拝されているガンジス川の流域に位置し、沐浴や観光を目的に年間百万人以上の人々が訪れるヒンズー教最大の聖地である。しかしながら、同市における下水処理場の処理能力は下水排出量のわずか三分の一に過ぎず、ガンジス川は沐浴に必要とされる水質基準をはるかに上回る汚染度合いであり、同市住民のみならず巡礼者や観光客への衛生上の影響が懸念されている。⁽⁹⁾」

【ガンジス川の聖性の根拠に関する説明】

「ガンジス川はもともと、天に住むガンガーという女神が川に姿を変えたもので、ある王の願いによって死者の霊を清めるために、その流れが地上を経由するようになった。⁽¹⁰⁾」

このようなことから、今でもヒンドゥー教徒の間ではガンジス河で沐浴をすれば、祖先の霊を供養し、果ては自分の罪まで浄化することができると思われている。

以上のことから、次のような認識の共有が期待できる。

ガンジス川の衛生状態は非常に悪いが、巡礼し、沐浴する人々が絶えない。それは、ガンジス川が神そのものであるという認識が、ヒンドゥー教徒の間に存在するからである。つまり、ガンジス川は「不潔」だが「清浄」なのである。

【展開②】

神道でいわれるところの、赤不浄や白不浄などの血に関する不浄観を、お宮参りの風習などを例に紹介する。

【鳥居をくぐれない母と子のお宮参りに関する説明】

わが国では、子どもが誕生すると、氏神にお参りに行く習慣があるが、誕生直後にお参りする場合は、母と生まれた子は、鳥居をくぐることができず、生まれた子からみて父なり祖母（閉経が予測される）なりが、神殿にお参りに行く。母と子が鳥居をくぐり、神殿前に行けるのは、誕生後一定の日数が経ったのちである。これは、出産が多量の出血を伴うものであり、その穢れのゆえに、神に近づくことがゆるされないのである。時の経過とともに、穢れがなくなる（弱くなる）と神の前に近づけるようになる。

【巫女に要求される処女性に関する説明】

巫女の代表として、卑弥呼の例を示す。

乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰う。（中略）夫壻無し。

（中略）復た卑弥呼の宗女、壹与、年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる（『魏志倭人伝』）卑弥呼に関する「夫壻無し」や、壹与に関する「年十三」などの記述から、王となり神に近い存在となるには、出産を経験することのない女性の有する処女性が求められていることが推測される。

また、これらの他にも、大相撲の表彰式に、女性の大臣が土俵に上がれなかつ

たような事例の提示も有効であろう。

【展開③】

神道では一貫して不浄とされてきた「血」がタブー視されず、むしろ好まれる事例を、インドのカーリー神によって紹介する。

【カーリー神の説明】

カーリー神はシヴァの妻の一人である。全身黒色で四本の腕を持ち、牙をむき出しにした口からは長い舌を垂らし、生首をつないだ首飾りをつけ、切り取った手足で腰を被った姿で表される。夫の上で、勝利の踊りを踊るカーリーは、生き血を好む神であり、カーリー信仰が盛んな、コルカタ（旧カルカッタ）では、山羊を生贄にして、カーリーに願い事をする儀式がしばしば行われている。

【まとめ】

以上のような検証を経ることによって、次の三つが確認されれば、本時限の目的は達成される。

- ①清浄・不浄という概念が我々のまわりには存在していること。
- ②同じ事柄が、ある場合は清浄性を有し、またある場合には不浄性を有することがあるということ。
- ③我々は、それらの概念の影響を受けた行動をする場合があるということ。

<第3限・暦>

【目的】

本時限においては、暦の考察を通して、それがいかに人為的であるかを確認し、また、暦をもとにして、我々が日常的時間と非日常的時間をつくりだし、その中でいかに生きているかを知ることが目的とする。

【導入】

まず「今日の年月日を答えなさい」と問いかけると、「西暦 2006 年 10 月 29 日」と全員が同じ回答をする。このことは、われわれが、時を計る尺度として同じ「基準」をもっていることのアかしである。以下にその「基準」についての考察を進めてゆく。

【展開①・西暦についての考察】

次に「『西暦』とは」と問いかけると、「イエスの生誕年が元年」とほぼ全員が回答する。そこで、誰がどのような経緯で、イエスの生誕年を特定したのか。あるいは、その特定結果に誤りはないのかについての考察を進めてゆく。(歴史上「西暦」と呼べるものは多数存在するが、ここでは、キリスト紀元をもって西暦と考えることとする。)

以下に、キリスト紀元成立の経緯と、その問題点について、簡単に紹介する。

イエス生誕から500年以上も経った6世紀に、修道士のエクシグウス・ディオニシウスが、キリスト教にふさわしくイエス生誕をもって紀元とするキリスト紀元を提唱した。彼は、それまで使われていたディオクレティアヌス紀元で248年であったその年を、キリスト紀元532年としたのである。彼は、主に次の三つの伝承を根拠にその年を特定したと思われる。第一、当時はイエスの死からほぼ500年位経っていた。第二、イエスはほぼ三十歳位で死んだ。第三、イエスの復活は3月25日の日曜日であった。

という三つである。それらを根拠に、その時から530年位前の、3月25日が日曜日の年を特定し、その年を元年と定めたのである。しかしながら、歴史学などの功績により、現在では、イエスの生誕は紀元前4年とみなされているようであるが、暦は4年進められることなく、現在もそのまま用いられている。⁽¹¹⁾

ここでは、以下の二点が確認される。

- ・キリスト紀元は、ディオニシウスという人物が特定した。
- ・その特定内容は、史実と異なっていた可能性が高い。

【展開②・曜日についての考察】

月についての詳細は省略し、曜日の制定経緯について簡潔に紹介する。

古代メソポタミアでは、公転周期のより大きい星が、地球よりも遠いと考えられていた。天動説を前提に、その説に従うと、遠い順に、土星・木星・火星・太陽・金星・水星・月の順になる。一日を二十四等分し、これらの星をそれぞれ順に当てはめていった。つまり、第一日の第一時が土星、第二時が木星…第二十四時が火星、第二日の第一時が太陽、第三日の第一時が月、以

下同様に、火星、水星、木星、金星となる。そして、それぞれの第一時を支配する星が、その日全体も総合的に支配すると考えられるようになり、第一日の土星の日から始まり、第七日の金星の日で終わる一週間ができたのである。

その後、ユダヤ人は、週の初めを日曜日とし、土曜日を安息日にし、キリスト教では、安息日を日曜日に変え、現在の日曜日を休日にする一週間となったのである。⁽¹²⁾

ここでは、次のような点が確認される

- ・「天動説」に基づいて、曜日の順列が決定された
- ・週の初めに関しては、ユダヤ教あるいはキリスト教の影響によって変更された

【まとめ①】

ここまでの考察で以下のような意識の共有が期待される。紀元にせよ、曜日にせよ、暦に関するものは、いずれも明確な科学的根拠に基づいて定められたものではなく、場合によっては誤った根拠に基づいているものもあり、いってみれば、ある時代のある人物が、ある立場において定めた人為的なものにすぎない。

さらに、かつて「世紀末」なる言葉がはやったが、実はその4年前に世紀末はすぎていた可能性が極めて高いことを知らせることも彼らにとっては、新鮮である。

【展開③・ハレとケについての考察】

我々は、この暦に、さまざまな着色をほどこすことにより、生活をより豊かにする手段として利用してきた。ハレとケの考え方をその代表として以下に取り上げる。「ハレ」と「ケ」の意味については、やや誘導的になるが、以下のような説明と例示を行う。⁽¹³⁾

「ケ」とは、一般には、日常態のことであり、あるいは、日常を過ごすエネルギーのようなものであろう。例えば、ケガレとは、ケが枯れた状態、つまり、エネルギー切れの状態を表しているとも考えられる。また、「ケ」は「俗なるもの」ともいえるかもしれない。

それに対し「ハレ」は非日常態である。一般的には、諸君の連想通りであるが、場合によっては、葬式が行われる日を指すこともある。また、「聖なるもの」ともいえるかもしれない。例えば、元日は「ハレ」の日であり、大み

そかは「ケ」が枯れた日といえよう。一年を過ごすことによって、エネルギーの尽きた我々は、元日を迎えることにより、エネルギーが充填される。晴れ着をまとい、酒をのみ、神社に詣でることによってである。兩日は時間的には24時間（見方によっては数秒）の違いがあるだけであるが、我々にとっては、まったく異なる日として機能する。

ちなみに、枕草子第百六十段には、「近うて遠きもの…師走のつごもりの日、正月（むつき）のついたちの日のほど」という件がある。祭りは、「ハレ」であり、祭りが終わると「ケ」に戻るのである。しかし、その「ケ」は次の祭りまでのエネルギーが、祭りによって得られ後の状態である。

元日の一日も、祭りの一日も、いずれも365分の1年にすぎないが、われわれは、暦をとおして、それらに意味を与えていくのである。

【まとめ②】

以上のような解説から、次のような理解が共有されれば、本時の目的は達せられたと考えられる。

われわれは、人為的に作成された暦を利用して、均一な時間の流れに、メリハリをつけ、生きるエネルギーをうまく補充しながら、人生を送っている。暦は、人間が生きやすいように用いられるべきであり。それにふりまわされ、悩むようなことになれば、正に本末転倒であり、滑稽とさえも言えよう。

最後に、徒然草第九十一段の、「吉日に悪をなすに必ず凶なり、悪日に善を行ふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。」を紹介して第3限を終わる。

<第4限 方角>

【目的】

釈尊伝において語られるエピソードを題材に、それらが含む、聖なるもののかかわりあい、あるいは、宗教的な整合性などを考えさせることにより、宗教的なものへの拒絶の回避の糸口を見出したい。ここでは、四門出遊と佛涅槃のエピソードを取り上げる。

【導入・エピソードの紹介】

四門出遊説話⁽¹⁴⁾は、出家前のゴータマが、東門から出た時は老人に、南門から出た時は病人に、西門から出た時は死人に会い、老病死という、避けることのできない人生の苦しみを目の当たりにし、北門から出た時に修行者に会い、出家を決意するという話である。

佛涅槃説話⁽¹⁵⁾は、いよいよ涅槃の近いことを知った釈尊が、沙羅双樹の下で、頭を北に向け、右脇を下にして横たわったという話である。

【展開①・問題提起】

いずれの説話も極めて有名な話であり、高等学校の倫理の教科書にも載っている。しかし、これらの紹介をもって宗教教育ということはできないと筆者は考える。宗教に無関心なものに対して、新たな知識はあたえられたとしても、彼らの情操の変化は期待しにくいからである。

東門・南門・西門・北門がそれぞれ老人・病人・死人・修行者に対応しているのは何故か、あるいは、頭北面西に理由はないのかを問題提起し、そのことを考察する時間を共有することにより、宗教的なものに対する無条件な拒絶からの回避を試みたい。ここで注目すべきは、いずれの説話も方角が関係しているということである。

【展開②・東西に関して】

東は、太陽が昇る方角である。さらに昇り来る太陽に我々は圧倒的な力を感じる。宗教に無関心であると言って憚らない人々であれ、昇り来る太陽には力を感じるであろう。そのことは、初日の出のときの人々動き⁽¹⁶⁾を見ればあきらかである。人々は、太陽に対する信仰心はなくても、わざわざ拝みに行くのである。何かしら強大なもの、力を感じるもの、あるいは、聖なるものに対して、畏れや敬いの念をもつ者はすでに、宗教に一歩足を踏み入れているのである。また、太陽は闇を破り、我々に光を与え、生きるエネルギーを与えてくれる存在でもあろう。このように東という方角には、力・勢い・生命力といったイメージが与えられよう。

それに対し西は、太陽が沈む方角である。我々に力を与えつづけることにより、衰えた太陽が沈む方角である。太陽が沈み去れば、我々は光を失い、恐れと不安に満ちた闇の世界へと再び戻されるのである。同じ太陽であっても、昇り来る太

陽を拝む人はいるが、沈み去る太陽に「力」を感じて拝む人は少ないであろう。このように西という方角には、消失・衰え・死といったイメージが与えられよう。⁽¹⁷⁾

以上のような、東と西に対する我々のイメージはおそらく万国共通であろう。当然のことながら、地球上の人類が居住している地域の中で、太陽が東から昇らず、西に沈まないところはないからである。また、日本史上有名な、聖徳太子が送った手紙の内容に隋の皇帝煬帝が激怒した話⁽¹⁸⁾も、上記のような方角のもつイメージが、人々にとって一般的なものであることの例証となろう。

【展開③・南北に関して】

東西の話が、人々にとって一般的であったのに対し、南北の話は、仏教が成立したインド特有のものと考えなくてはならない。なぜならば、東西を分けるのが太陽であったのに対し、南北を分けるのは、地形である、風土であり、気候であるからである。

まず、インド文化について略説してみると、我々が通常インド文化と呼ぶものは、紀元前1500年ごろのアーリア人の侵入に起源すると考えて差し支えない⁽¹⁹⁾。彼らの侵入により、被征服民となったインド先住民は隷属を余儀なくされ、あるいは、南へと追いやられた⁽²⁰⁾。その結果、インドの文化はアーリア中心の北インド文化と先住民中心の南インドの文化に大別されるに至る。我々が通常インド文化としてとらえる、ヒンドゥイズムやブディズムは、支配者であるアーリアの文化である。アーリア人にとって南に住む人々は人種を異にするものであり、彼らの文化は異種のものである。

次にインドの気候・風土および地形を考えてみると、インド大陸は三方が海に面し、北方にはヒマヤラをいただいている。温帯モンスーンに属するインドの気候は、雨期と乾期に大別される。およそ6～9月ごろの雨期が終わると、翌年の雨期までの間、特に内陸部ではほとんど降水がなく、インドの大地は乾ききり、雨期直前の数ヶ月はまさに灼熱となる。しかし、遙か北方のヒマヤラは雪をたたえ、神々しくそびえている。灼熱の大地に住むインドに人々にとって、ヒマヤラはまさに非日常的空間・場所である。

さて前置きが長くなったが、北が聖なる方角、南が魔の方角というイメージを

連想させるインドの説話をいくつか示してみる。

- ①破壊神として有名なシヴァ神は、四つの顔を持ち、そのうち南面は忿怒の相を呈している。⁽²¹⁾
- ②『ラーマーヤナ』は、ラーマ王子が、悪魔ラーヴァナに誘惑されて、南のランカー島に幽閉されていた、妃のシーターを奪い返す物語である。
- ③神々が世界の各方向を守護するという考え方が叙事詩などの中に見られるが、それらの内、南方の守護神は死神ヤマの場合が多い。⁽²²⁾
- ④ヨーガを行わずの場合には、北方、あるいは、東方を向いて修するように經典の註に規定されている。⁽²³⁾
- ⑤様々な神々やその妃たちが住むと伝えられる山々はいずれもヒマラヤ山脈がイメージされていると考えられる。⁽²⁴⁾

つまり、神々の住居であり、非日常的空間であるヒマラヤの方角は聖なる方角であり、一方、南方は病をもたらす魔の方角なのである。

【展開③・説話の整合性】

これまで行ってきた方角の考察より、次のようなことがいえよう。東は誕生・勢い・力の方角、西は衰え・死の方角、南は病をもたらす魔の方角、北は神々の住む聖なる方角なのである。

四門出遊説話はゴータマが避けることのできない人生の苦しみを目の当たりにした上で、苦しみを減する悟りのためには出家が必要であるということを実感するという、いってみれば出家の動機付けの物語である。そこで、後の悟りを開いたゴータマが減しきった、生・老・病・死という四苦のうち、一般には苦しみと捕らえにくい、生を除き、それぞれを順に、それぞれを表象する方角に、つまり、東・南・西に配置し、さらに、聖なる出家者は、聖なる方角である北に配置したと考えられる。⁽²⁵⁾

また、涅槃における頭北面西も同様に、自らの身体のうち最も聖性の高い頭⁽²⁶⁾を聖なる山ヒマラヤの方向に向け、これから赴くべき方向に顔を向けたと考えられる。⁽²⁷⁾

【まとめ】

以上のような考察、あるいは、解説を展開することにより、特定の宗教を押し

付けることなく、なお且つ、十分に宗教的な思索を共有できると思われ、宗教的なものへの無条件な拒絶は十分に回避できるのみならず、無宗教を自称する自分たちが、如何に宗教的なものに囲まれ、あるいは、それらの影響を受けて生きているかを確認できるはずである。この確認ができれば、本時の目的は達成される。

【補足】

宗教的なものに無関心であるはずの彼らは、実は、いわゆる迷信のようなものにはかなりその行動を拘束されている事実も見逃せない。例えば、「北枕で就寝する者？」という質問に対し、住宅事情などでやむを得ない場合を除いて、ほぼ全員の者が「No!」と答える。そこで「何故？」と質問すると「死者を北枕で横たえるから縁起が悪いと聞いた」と答える。さらに、「何故死者をそのように横たえるのか？」という質問をすると、「お釈迦様がなくなられた時、そのようにしたから」と答える。では「何故お釈迦様はそのようにしたか？」と尋ねると、「???」である。そこで先程の解説に基づいて「お釈迦様は、聖なる方角に頭を向けられたのである」という結論に達すると、北枕＝縁起が悪いという構図が完全に崩れ、むしろ、北枕＝縁起が良いことになり、その瞬間、縁起が悪いと知っていながら諸事情によりやむを得ず北枕で就寝していたものたちの顔に安堵の様子が伺える。もちろん、そのような説明を聞いた後でも、さっそく北枕で就寝するものは少ないであろう。しかし、例えばある迷信に行動を拘束されるにしても、思索をめぐらした上での行動は極めて危険が少ないと言えるのではないだろうか。

<第5限・インド思想概説>

【目的】

世界の宗教を大きく二つに分類した上で、一方の側のインド思想を概観する。

【導入】

世界の主だった宗教の考察に入る。それらの宗教を、倫理などの教科書の記述に従って、「祈り型」と呼ばれるグループと、「瞑想型」と呼ばれるグループに分類し、それぞれの構造を次のように概説する。

【祈り型】(ユダヤ教・キリスト教・イスラーム)

唯一絶対で創造者たる神と、人々に間には絶対的な断絶(距離)があり、両

者は決して交わることはない。また、人から神へは「祈り」や「契約の順守」などのベクトルが向かい、神から人へは「救済」や「裁き」などのベクトルが向かう。

【瞑想型】（ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教）

「さとり」という究極的な境地を想定し、人々にはそこにいたる可能性がある。つまり、人は、仏なり神なりの位に到達できうる。

【展開①・インド思想の歴史的概観】

瞑想型に分類されるインドの思想を概観する。ここでは、詳細な解説は避け、アリア主導（以下、バラモン正統派）と非アリア主導に着目した、歴史的な変遷の概観にとどめ、以下のように七期に区分できることのみを示す。⁽²⁸⁾

I：紀元前 2500～紀元前 1500（アリア人侵入以前）

インダス文明の時代

II：紀元前 1500～紀元前 500

バラモン中心主義の時代

III：紀元前 500～紀元後 600

仏教・ジャイナ教など非アリア諸派の時代

IV：600～1200

ヒンドゥイズム興隆の時代（*バラモン教が土着信仰を吸収し、ヒンドゥー教へ昇華していく過程についても簡単にふれる）

V：1200～1858

イスラーム支配下のヒンドゥイズムの時代

VI：1858～1947

イギリス支配下のヒンドゥイズム復興の時代

VII：1947～

独立回復後のヒンドゥイズムの時代

【展開②・輪廻転生説】

輪廻転生の思想とカーストについて、倫理の教科書の記述やバラモン教の経典などを参考に、以下のように簡単にふれる。

人間の魂はその生前中の行為（業）によって生じるさまざまな運命にしばら

れており、これは死によっても断ち切られることはない。人間は死ぬと、それぞれの業にふさわしい生きものの姿をとって再び生れ変わる。こうして無限に生死をくり返し、その間、心の安らぎを得ることがない。⁽²⁹⁾

「死者の魂は、天に昇り、雨雲となり、そののち地上に降り、この世で穀物として生まれる。人々が、それを食すると、精子にとりこまれ、ふたたび生まれることとなる。この世で善い生活を行っている人々は、バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャなどの胎内に入るであろう。この世で悪い生活を行っている人々は、犬・豚・賤民などの胎内に入るであろう。」⁽³⁰⁾

【展開③・インドの宗教がめざすもの】

インドの宗教が共通してめざす「解脱」・「さとり」について以下のように触れておく。

輪廻転生の思想は、インド思想をほぼ貫いており、また、それからの解脱がインドの宗教が共通してめざすところである。解脱とは文字通り、解って(さとして)、脱することである。脱する対象は「輪廻転生」である。つまり、〇〇が解れば(をさとれば)、「輪廻転生」から脱することができるかと略記できる。

ここで、バラモン正統派と非正統派の代表である仏教では、解る(さとする)対象である〇〇が異なるのである。バラモン正統派において、〇〇は「梵我一如」であり、仏教においては「縁起」である。

ここでは、以上のような解説にとどめ、縁起などの詳細については後日の話題とする。

【まとめ】

以下の点が確認されることによって本時の目的は達成される。

- ①世界の主だった宗教は二つに大別されること
- ②インドの思想は、その歴史から鑑みて、バラモン正統派とそれ以外の思想との間で主導権争いがあるということ
- ③インドの宗教は、輪廻転生の思想をその背景にもっているということ、さらにその思想が、カースト制度を成り立たせているということ
- ④インドの宗教は、輪廻転生からの解脱をもとめるということ

<第6限・ヨーガ>

【目的】

インドの諸宗教が、「さとり」あるいは「解脱」を獲得するために依拠する行法であるヨーガの解説を通じて、「瞑想型」⁽³¹⁾の宗教に関する理解を深める。

【導入】

まず、「ヨーガ」という言葉から連想されることを列挙させる。彼らの回答の一部を紹介すると以下の通りである。

健康体操、あやしい、修行者、インド、変な格好、座禅…

ここでは、ヨーガには、心や体の働きを抑制してゆくタイプのもと、反対にそれらを活性化してゆくタイプのものの二種類⁽³²⁾があることを解説し、前者の例として、静かなイメージの坐禅が、また、後者の例として、健康体操があげられることを知らせる。更に、本時において扱うヨーガは、前者のタイプのものであることを確認して、詳細な説明に入る。

【展開】

これより、バラモン教の経典に説かれるヨーガに関する記述をもとに、代表的なヨーガの修行法である、八つの階梯を順次解説する⁽³³⁾。

〔第一の階梯 禁戒・戒めを遵守する〕

ヨーガを行うための準備段階として、不殺・真実語・不盗・禁欲・不所得という五つの戒めの遵守が求められる。

不殺は、これらの中で最も重要であり、中心的な戒めである。また以下の四つの存在意義は、不殺を確実にするためにある。不殺の内容は、あらゆる生き物を傷つけたり、その命を奪ったりしないことである。

真実語は、真実のみを語ることであり、嘘をつかないことであるが、悪を助け、善に不利益を与えるような真実は語ることは許されない。

例えば、暴漢におそわれている娘が目前を通り過ぎ、その後に暴漢に娘の行く先を尋ねられた場合に、娘の行った先を暴漢に語るというような場合である。この場合は、話さないことが求められる。

また、事実であっても、聞き手に間違った理解をあたえようとして話される場合も同様に真実語とは認められない。例えば、インドの古典であるマハーバーラ

タでは、ユディシティラが、かつての師であり、今は敵将となっているドゥローナを騙し、真実語の戒を犯す場面が次のように語られている。

ユディシティラが、クリシュナの「ドゥローナの最愛の息子であるアシュヴァッターマンが戦死したかのようにドゥローナに思わせれば、ドゥローナは戦いをやめるであろう。」という助言に従い、ダルマ（正義の法）に反することであると知りながら、アシュヴァッターマンという名の象を殺して、ドゥローナに対し、「アシュヴァッターマンは殺された。」と叫んだのである。これを聞いたドゥローナは尋ね返すが、それに対しユディシティラは、「そのとおりです。アシュヴァッターマンは殺されました。」と答える。その後で罪悪感に苛まれた彼は、小声で「象のアシュヴァッターマンが」と付け加えたが、歓声にかき消されて、その声はドゥローナには聞こえなかった。息子が戦死したと勘違いさせられ、気落ちしたドゥローナは破れてしまった。しかし、不真実を語ったユディシティラの乗ったそれまで決して地面につくことのなかった戦車の車輪が地面についてしまった。つまり、ドゥローナには「象のアシュヴァッターマンが死んだ」という事実が伝えられずに、「息子のアシュヴァッターマンが死んだ」と誤って伝えられているので、真実語の戒に反することになるのである。

不盗は、文字通り盗みをしないことである。

禁欲は、感覚器官を制御し、性的な欲望のままに行動しないことである。また、この戒めを守ることにより、ヨーガを行うエネルギーが得られる。

不所得は、物質的なものに執着せずに、多くのものを所有しようと思わないことである。

〔第二の階梯 内制・心身をヨーガにふさわしくする〕

次に、自らの内面をヨーガを行うのに相応しい状態にするために、身体を清浄にすること・心を清浄にすること・満足すること・苦行・聖典の学習・自在神への祈念を行う。

身体を清浄にすることとは、水などを使って、体を清めたり、また、酪や酥など⁽³⁴⁾の、ヨーガを行わずの者にとってふさわしい神聖な食事をとることにより、体の内部を清めることである。

心を清浄にすることとは、貪りや怒りなどの感情をおこさないようにすること

である。

満足することとは、身近にある滋養の原因となるものより以上の獲得を、望まないことである。

苦行は、細かく規定された方法によって、暑さや寒さに耐えたり、飢えや渇きに耐えることである。

聖典の学習とは、奥義書であるウパニシャッドなどを学ぶことである。

自在神への祈念とは、ヨーガの神である自在神に祈りを捧げることである。⁽³⁵⁾

〔第三の階梯 坐法・坐り方〕

二つの準備的階梯を経て、いよいよ、実際にヨーガを行じる階梯となる。まずは、坐る場所について、次のように規定される。

- ① 神聖な山の洞窟や聖なる大河の砂州などの清浄な場所
- ② 明りがなく、水の流れる音などが聞こえない場所
- ③ 人や虫がいない落ち着いた場所
- ④ ごろごろした石のない場所

以上の条件を備えた場所に、布切れ・アンテロープの皮・クシャ草を重ねて敷いて、その上に坐る。

次に、坐り方について規定される。坐り方の条件として、次の二つが挙げられる。

- ① 手足が震えるような、苦しいものであってはならない。
- ② 不動の姿勢を保たねばならない。

以上の条件を満たした上で、更に詳細な規定が次のようになされる

- ① 腰・胸・顎を固定する
- ② 鼻先を凝視する
- ③ 唇はしっかりと閉じる
- ④ 歯はかみ合わせない
- ⑤ 顎と胸は拳一つ分離す
- ⑥ 舌先は前歯の内側に押し付ける
- ⑦ 両手は合掌する

〔第四の階梯 調息・呼吸を制御する〕

呼吸と吸気をコントロールすることで、次の四種類に大別される

- ①鼻先から始まって、足の親指までの空間を空気が通過するように息を吸った後で、呼吸を止めるもの。
- ②足の親指から始まって、鼻先までの空間を空気が通過するように息を吐いたあとで、呼吸を止めるもの。
- ③突然呼吸を止めた後、体内の空気で頭の高から足の裏までの空間を満たすようにするもの。
- ④第一のものと、第二のものを繰り返しつつ、徐々に、呼吸の回数や量を減らしてゆき、限りなく無呼吸の状態に近づけるもの。

以上のような方法により、呼吸を制御することによって、身体の活動を停止状態に近づけていくことが求められている。

〔第五の階梯 制感・感覚器官の働きを制御する〕

目・耳・鼻・舌・皮膚といった感覚器官が、本来対象とする、色形・音・香・味・温度などに、なるべく結びつかないようにすることであるが、心と感覚器官の関係を、心を女王蜂に、感覚器官を蜜蜂にたとえて、女王蜂が飛び上がると、それに続いて蜜蜂が飛び上がるようであると説明されている。つまり、たとえ感覚器官の働きを制御できたとしても、心の働きは抑制されないが、心を抑制すれば、おのずから感覚器官は抑制されるのである。すなわち、感覚器官を通して、心が外界の対象に向かわないようにすることである。

〔第六の階梯 凝念・精神集中の第一段階〕

これ以降の、三つの階梯は、同じものを対象として連続して行われ、順次精神集中が深まっていく。

凝念は、体内においては、臍・心臓・顎・舌先などに、体外において太陽・月などを対象として、心を集中することである。

集中する時間に関しては、ある解説書によれば、16 マートル⁽³⁶⁾かけて息を吸い、64 マートルの間息を止め、32 マートルかけて息を吐く。つまり合計 112 マートルを 1 サイクルとして、12 サイクルの呼吸をする間、おのおのの対象に心を集中するとしている。

〔第七の階梯 静慮・精神集中の第二段階〕

凝念をさらに深めたものである。凝念との違いは、例えば、「太陽」を対象として集中する場合、凝念のレベルでは、「丸い・強烈な・光」というようなさまざまなイメージが伴うが、静慮のレベルでは、「太陽そのもの」に心が一筋に集中していく。

また、集中する時間に関しては、凝念が12サイクルであったのに対して、静慮では、12倍の144サイクルの間の集中が要求される。

〔第八の階梯 三昧・精神集中の第三段階〕 1

心が対象の本質に入り込み、あたかも心が対象そのものであるかのようになり、心が対象になんらかのイメージを持つことはもはやなくなった状態である。それは、水晶が近くにあるあらゆるものを映し出す様子に例えられている。

集中する時間に関しては、静慮の12倍の1728サイクルの間の集中が要求される。

以上をまとめると、禁戒・内制によって、ヨーガを行うのにふさわしい生活の完成をめざし、次の坐法・調息・制感によって、ヨーガを始める身体的準備を行い、凝念・静慮・三昧という実際に対象に心を集中してゆくヨーガの段階が実践されるのである。

また、各階梯には、それぞれの完成の目安となる指標が詳細に決められている。例えば、禁戒の不殺生が完成するとその人の前では、蛇とマンガースが敵意を捨てるとか、内制の苦行を完成すると、身体の巨大化や微細化が可能となり、感覚器官は極めて鋭くなり、遠方のものを見たり聞いたりすることができるとか、超能力を思わせるような指標が多い。

また、凝念・静慮・三昧は一連の階梯であるので、まとめて総制とも呼ばれ、その完成の指標は、例えば、月に対する総制が完成すると、星の配置を知るとか、臍に対する総制が完成すると、飢渴を抑えるとかである。

【まとめ】

以上のようなヨーガの行法が、仏教諸派やジャイナ教諸派にも多大な影響を与えたことにも触れ、瞑想型に分類されるインドの諸宗教の根本的な行法としての地位を占めていることを確認して、本時を終わる。

<第七限・縁起と涅槃>

【目的】

仏教が目指した、「さとり」の「目的語」、つまり「何を」さとののかについての考察を本時の目的とする。

【導入】

第5時限目のインド思想の授業でふれた、「輪廻転生」および「解脱」について簡単に振り返る。

【バラモン教の場合】

ワカル対象は「梵我一如」＝輪廻主体（アートマン）と宇宙原理（ブラフマン）の同一性

*つまり、輪廻主体である「個」が「全体」に同化した状態が完成すれば輪廻転生は不可能となると考える。

【仏教の場合】

ワカル対象は「縁起」＝輪廻主体の非存在

*つまり、輪廻主体の「個」としての存在を否定する事によって輪廻転生を否定しようとする。

【展開①】

対話形式のプリントを用意して、釈尊のさとりや涅槃について考察する。⁽³⁷⁾

先生：お釈迦様が修行を始めた理由は、あらゆるつらいことから解放されたかったからなんだ。つまり、一切の苦しみをなくすためだったんだよ。私たちは、つらいことに囲まれているよね。

生徒：欲しいものが買ってもらえないとか？

先生：そう。今日もあいつに顔をあわせなきゃいけないとか、熱が出たときとかもね。つらいでしょ？ その他にも、今は元気な君も、いつかは年をとって死んでしまうなんて考えたりしたことはないかな？ そんな時の君の心の中はどうなっているかな？

生徒：欲求不満！ むかつく！ 不安になる……

先生：じゃあ逆に、もしもすべてのつらいことから解放されたら、君の心の中は？

生徒：欲求不満じゃなくて、むかつかなくて、不安じゃない……結構いいかも。

先生：そんな心の状態を涅槃というんだよ。心の中のざわめきが、ふーっと風に吹き消されたような、あるいは、波一つない水面のような状態かな。つまり、つらいことから解放された心の状態を涅槃というんだ。

生徒：う～ん。悟れば、つらいことから解放されて、涅槃の状態になる？

先生：そのとおり。悟りを得たお釈迦様は、涅槃の状態を獲得されたんだ。今までの話をまとめると、お釈迦様は、自分は苦しみに取り囲まれているという自覚をもたれて、それをなんとかしようと思い、修行をはじめられた。そしてついに、悟りを得て、死をはじめとする一切の苦しみから解放されて、涅槃の状態に入った。ということになるね。ここで抜けていることは、どうすれば苦しみから解放されるのかということだよ。

生徒：そうです。そこが知りたい！

先生：悟るという言葉は、何かがワカルという意味だよ。何かがワカッタ結果、苦しみから解放され涅槃の状態を獲得したんだよ。

その何かは「縁起」といわれるんだけど、詳しくは次回説明するね。

生徒：ともかく、お釈迦様は、縁起を悟ったから、苦しみから解放されたということですね。

先生：そうだよ。縁起を悟ったお釈迦様は、あらゆる苦しみから解放されたんだ。死からも解放されたんだよ。

生徒：死からも解放？ つまり死なないってことですか？

先生：そう。正確には、「死ぬということはない」だけどね。縁起の説明をする時には詳しく話してあげるよ。ともかく、お釈迦様は「死ぬ」ということを否定してしまったんだ。

だから、悟りを得て、死を否定してしまったお釈迦様に対して、「亡くなった」とか、「死んだ」とかは言えないんだよ。だって、お釈迦様の辞書には「死」という言葉はないのだからね。そこで、お釈迦様の「死」をあらわす時は、お釈迦様の心の状態である涅槃という言葉を使い、「涅槃に入られた」というような表現をするんだよ。

【展開②】

対話形式のプリントを用意して、縁起について考察する。⁽³⁸⁾

先生：君の「いのち」はいつ始まったの？

生徒：平成5年4月8日です。

先生：それは誕生日でしょ？それ以前は、君の「いのち」はなかったの？例えば、お母さんのおなかの中で死んでた？

生徒：生きてました！だから、お母さんのおなかの中で心臓ができた時に「いのち」が始まりました。

先生：じゃあ、それ以前は、君の「いのち」はなかったの？例えば、精子や卵子の状態の時はどうだろう？

生徒：僕の「いのち」とはいいがたいけど、確かに何かしら「いのち」のようなものの存在は感じます。

先生：そうだよな。つまり君の「いのち」とご両親の「いのち」がつながっていることに気づいた？

つまり、君の「いのち」はなにかの拍子に突然始まったわけではなく、ご両親の体の中ですでに始まっていると考えられるよね。

生徒：少なくとも、連続していることは事実だと思います。僕は突然生まれたのではなく、父や母の細胞が、少しずつ変化して、今の僕になっているし、これからもその変化は続くと思う。

先生：そう。そして、ご両親はそれぞれのご両親とつながっている。この連続は、太古の昔まで続くよね。それらを「縦の連続」と考えると、食物連鎖なんかは「横の連続」と考えられるんじゃないかな。

植物を草食動物が食べ、一部はその細胞となり、一部は排泄される。細胞となった部分は肉食獣に食され、排泄された部分は、バクテリアなどによって分解され、土壌になる。土の中の養分は植物によって取り込まれる……非常に大雑把に説明したので不十分なところもあるかもしれないけど、無からはなにも生じないし、現存するものは決して無くならないということはわかったと思う。

生徒：状態が変化するだけですな。

先生：そのとおり。例えば、私は、適当に養分などを補給しながら、ずっと昔から、状態が変化してきて、たまたま今は、君の目の前にいるような状態を

とっているということなんだ。

また、今後に変化し続けて、心臓が動いている状態から、動いていない状態へと変化していく。

生徒：死ぬってことですか？

先生：「死ぬこと」は「生まれること」が前提だよな。でもさっき考えたように、「いのち」の始まりが確定できないのに、「いのち」の終わりが確定できるのだろうか？

また、死については、全く別に次のようにも考えられる。仮に「いのち」というものに終わりがあるとして、それはいつなんだろうか？ 脳の機能が停止した時？呼吸が止まった時？心臓が止まった時？それぞれ微妙に違うよね。

生徒：臓器移植でも、そのあたりが問題になりますよね。

先生：そう。「いのち」の始まりがそうであったのと同じように、いわゆる死に関しても、その周辺の状態はすべて連続していて、ここから前が「生」で、ここから後が「死」であるという線は引けないんだ。それを無理に引こうとしたのが「脳死判定基準」だよな。

生徒：死の瞬間を人為的に決めたのですね。

先生：心臓が止まり、呼吸をしなくなって一ヶ月ぐらいした人をみれば、確かに「死んだ」と思うかもしれないけど、一ヶ月前に「生きていた」時と、「死んでいる」今との間に明確な境界線は引けないはずだよな。つまり、連続性をもった状態の変化であると考えられる。

生徒：「いのち」は始まりも、終わりも特定できない！

先生：そのとおり。そもそも「いのち」を自分のものと考えから、始まりや終わりを考えざるを得なくなるんだ。連続する「いのち」の、どこからどこまでが君の「いのち」なんだろうか？

生徒：始まりも終わりも境界線は引けない……

先生：じゃあ。君の「いのち」はないの？

生徒：いいえ。僕は生きています！

先生：そのような連続性が認められるすべての「いのち」のありようを「網」に

たとえてみよう。「網」は縦の紐と横の紐で編んであり、それぞれが交差しているよね。四隅が無限に広がる「網」を想像してごらん。そして紐の交差点の一つ一つが、「いのち」をもった存在だと思って下さい。すべての「いのち」はありありと実在するけど、ある一つの「いのち」をその「網」から取り出すことはできないよね。すべての交差点はつながっているから。

生徒：「いのち」は自分だけのものではない。すべての「いのち」はつながっている。すべての「いのち」は突然発生するものではなく、あらゆる存在と関連し、連続しながら存在している。あるいは、すべての「いのち」は一つとも考えられる。

先生：そのとおり。そのようなありようを、「縁起」というんだ。そして、お釈迦さまは「縁起」をさとり、老病死という苦しみを減したんだ。「私」という存在を取り出すことができないから、苦しみを感ずる主体が無くなってしまふんだよ。つまり、「苦しんでいる私」が確定できないことになる。

「『私』は『私個人』として存在する」というように考えることが間違っていることに気づいたんだよ。一方で、すべての存在は関わりあい、連続している。だからこそ、「いのち」は大切なんだ。個人のものとは考えられないからね。⁽³⁹⁾

【展開③】

更に、慈悲と平等について考察する。

先生：また、仮に苦しんでいる人がいれば、それは決して他人事ではないよね。だって自分と他人の境界線は引けないんだから。だからこそ、人は他人に対して慈しみの心を持てるんだ。正確には、「どうしても持ってしまう」ともいえる。例えば、おなかが痛いときは自然に手がそこへいくよね。それと同じ事が、すべての存在の間で行われるはずなんだ。

また、他との区別がないんだから、すべては平等と考えられる。カースト制度が社会にシステムであるインドにあって、お釈迦さまが平等を説いた理由はここにあるんだ。

仏教の根幹である「慈悲」と「平等」は、「縁起」の正しい理解から生じる必然的な態度なんだよ。

【まとめ】

初転法輪で説かれた四諦・八正道について簡単に説明し、釈尊が初転法輪で縁起の具体的内容を説かずに、具体的実践徳目である八正道を説いたことに注目し、縁起の理解を前提とせずとも、日々の実践を繰り返すことにより、縁起の理解が体現されてくるという立場をとっていること、つまり仏教にとって重要なことは、縁起の理解のみではなく、縁起の理解に基づく実践であることを確認する。⁽⁴⁰⁾その上で「仏教の目指すところは、縁起思想に基づく慈悲の実践である」というまとめをして本時を終わる。

<第8限・キリスト教>

【目的】

「祈り型」に分類される、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム⁽⁴¹⁾について、高等学校の倫理の指導内容のレベルで概説し、それらに対する理解を深めることを本時の目的とする。

【導入】

第5時限目でふれた、「祈り型」と「瞑想型」について、簡単に振り返る。

【祈り型】（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）

唯一絶対で創造者たる神と、人々に間には絶対的な断絶（距離）があり、両者は決して交わることはない。また、人から神へは「契約の順守」や「祈り」あるいは「愛」などのベクトルが向かい、神から人へは「救済」や「裁き」あるいは「愛」などのベクトルが向かう。

【瞑想型】（ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教）

「さとる」という究極的な境地を想定し、人々にはそこにいたる可能性がある。つまり、人は、仏なり神なりの位に到達できうと考える。

【展開①】

ユダヤ教の解説（*以下、字数の都合上、解説内容を箇条書きにして示す。）

- ・旧約聖書（特に創世記や出エジプト記）
- ・ヤハウェを信じるユダヤ人の民族宗教
- ・ヤハウェの性格＝世界創造・人格的存在・唯一・全知全能

- ・選民思想＝ユダヤ人は、神との契約によって選ばれ、救いを約束された民族
- ・モーセの十戒（偶像崇拜の禁止など）などの律法
- ・神の性格＝裁く神＝神の意志に反すれば厳しく罰せられる
- ・預言者の存在
- ・メシア思想

【展開②】

キリスト教の解説（＊以下、字数の都合上、解説内容を簡条書きにして示す。）

- ・神の性格＝赦す神＝「悔い改めて福音を信じよ」
愛の神＝アガペー（無差別無償の愛→世界宗教へ）
- ・イエスの律法＝神への愛（第一の戒め）・隣人愛（第二の戒め）・黄金律（「人にしてもらいたいと思うことは何であれ、あなた方も人にしなさい」）
- ・原罪思想→イエスの十字架上の死による贖罪
- ・キリスト教三元徳（信仰・希望・愛）＝パウロの信仰義認
- ・アウグスティヌスの教父哲学＝恩寵予定説・カトリック教会の権威
- ・トマスアクィナスのスコラ哲学＝「哲学は神学の侍女」

【展開③】

イスラームの解説（＊以下、字数の都合上、解説内容を簡条書きにして示す。）

- ・アッラーの性格＝世界創造・人格的存在・唯一・全知全能
- ・ムハンマド＝最大にして最後の預言者（モーセ・イエスも預言者）
- ・偶像崇拜の禁止
- ・クルアーン
- ・六信＝アッラー・天使・啓典・使徒・来世・定命の存在を信じること
- ・五行＝信仰告白・礼拝・喜捨・断食（ラマダーンの日の出から日没まで）・巡礼を行うこと

【まとめ】

「知」の立場に立つギリシア思想と、「信仰」の立場に立つキリスト教は、ある時は対立し、ある時は結合して、その後の西洋思想の基礎となったことを確認して本時を終わる。

<第9限・浄土教>

【目的】

本校を設立した浄土宗について、高等学校の倫理の指導内容のレベルで概説した上で、やや詳細についても触れ、それらに対する理解を深めることを本時の目的とする。

【浄土宗概説】（*以下、字数の都合上、解説内容を箇条書きにして示す。）

- ・法然
- ・他力本願
- ・専修念仏

【浄土教詳説】

①浄土教史概観（*以下、字数の都合上、解説内容を箇条書きにして示す。）

- ・紀元一世紀ごろ…インド北西部で発祥
- ・善導（唐の時代）
- ・法然（1133年～1212年 鎌倉時代）

②浄土教の理論的枠組み

- 一 菩薩とは誓願をたてて修行し、誓願を完成すると成仏する（悟りを得る）
存在であることの確認
- 二 法蔵菩薩の第十八願（『無量寿経』の一節）を紹介する

（原文）

設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺
（書き下し）

もし我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生ぜんと欲し、乃至十念せんに、若し生ぜずば、正覺を取らじ

（拙訳）

どんな人であれ、私の國に生まれようとして、念仏を称える者が、私の國に生まれるとことがないうちは、私は覚ったことにならない

三 救済理論の確認

法蔵菩薩はすでに阿彌陀仏になっている→誓願は完成している→念仏した者は、必ず極樂へ生まれる（すでに、救われている！）

四 典拠の確認（開宗の御文）

* 善導大師『観経疏 散善義』の一節を被閲して、法然は開宗にいたった
(原文)

一心専念弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念念不捨者 是名正定之業
順彼仏願故

(書き下し)

一心に専ら弥陀の名号を念ずるに 行住坐臥にも 時節の久近を問わず
念々に捨てざるは 是を正定の業と名づく かの仏の願に順ずるが故に

(拙訳)

一心に専ら阿弥陀仏のみ名を称えること、すなわち、歩いている時も、止っている時も、起きていても、寝ていても、時間が長いとか短いとかの別なく、かたときも忘れないで念仏することを正定業(かならず救われる正しい実践)という。なぜなら、この行は、阿弥陀仏がお誓いになられた本願にかなっているからである。

③ 浄土宗の実践のあり方

・ 現世の祈り→来世の成仏→衆生救済

- 一、現世においては、阿弥陀仏の誓願力にすがり（他力）、極楽往生を願う
- 二、往生した後、仏道修業に励み、悟りを目指す
- 三、悟りを得た後、この世に戻って、衆生救済を行う

④ 宗教構造について

[祈り型] = ユダヤ教・キリスト教・イスラーム（中近東）

聖なるものと俗なるもの間には、絶対的な空間的断絶がある

⇒ 祈る

[悟り型（瞑想型）] = ヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教（インド）

聖なるもののうちに俗なるものが包括されている = 俗なるものが聖なるものに成りうる

⇒ 悟り

⑤ 浄土教の宗教構造

浄土教は、1本の時間軸の上であって、現世においては「祈り型」、往生の後

は「悟り型」が機能すると考えることができる

【まとめ】

最後に、釈尊の一生と念仏者のそれを比較した上で、両者に矛盾がないことを確認して本時を終わる。（＊矛盾はないが、念仏者の現世における態度は、一神教のそれと比較され得ることは指摘する）

〔釈尊〕：出家→修行→開悟→伝道・衆生救済→涅槃

〔念仏者〕：念仏→往生⁽⁴²⁾→修行→開悟→還相→衆生救済→涅槃（？）

<第十限・まとめ>

前回まで全9回の講義の感想について、ディスカッションを行う。⁽⁴³⁾

【H・Y君】

宗教と聞くと「対立・戦争」といったような負のイメージばかりが思い出されてしまう。しかし、そんなものよりも、「私たちの行為」という形で、もっと身近に宗教があったのだ。そもそも宗教というのはどういうものなのか。今回授業を受けてわかったことは、「人は、特定の宗教なしには生きられるかもしれないが、何らかの宗教には必ず関わっている」ということだった。私自身の普段の生活を眺めてみると、いたるところに「宗教」はあった。ところが、今まで「宗教」と無縁の生活を送ってきた、いや無縁の生活を望んでいたのかもしれない。

【K・Y君】

輪廻転生の話では、アートマンがその人の行為を記録していて、それが未来につながっていくというのは全く信じられない。インドの人々がそのことを信じているのであれば、日本人とは感覚が全く異なっていると思う。また、体の上部が浄、下部が不浄、右が浄、左が不浄というのもしらなかつた。ハレとケについては、それらが交互に顕れ、大晦日と元旦を例に話された、ケが大きいほどハレが大きいということは妙に納得させられた。「あなたのいのちはいつ始まったか？」のという問いに関しては、今までは「受精したとき」と漠然と考えていたが、すべての命が網の目のようにつながっているという考え方には感動を覚えた。

【Y・N君】

人が初めて「聖なるもの」だと認識したものは、山や大木といった大きなもの、

奇怪な動物や現象だったと思う。そのような聖なるものを対象にして、仏教・イスラム教など現存する宗教の原型がつけられたはずだ。宗教は人間独自の特徴であり、何らかの形で私たちは宗教に関わっていると思う。マルクスを信じることも宗教の一つだと思う。自分が信じたいことは、広い意味では宗教と言えるし、宗教は時代や地域によって変化する人間の特徴だと思う。

[Y・A君]

これまで、浄土宗に対してあまり高い評価をしていませんでした。本来の仏教というのは釈迦がそうしたように、厳しい修行をして「悟り」を得るというものであったはずです。けれども浄土宗ではまず現世を嫌なものとして諦め、念仏を唱えることにより、阿弥陀様にすがり極楽浄土に行くというもので、先に述べた本来の仏教とはかけ離れた教えだと思ったからです。しかし、浄土宗では、極楽へ行った後に修行をして悟りを目指すということを学び、東海学園の礎をなしている浄土宗の教えが、仏教の教義に反していないのだという理解が深まりました。

[R・N君]

仏教が説く、いのちは単独では取り出せず、他の物とも区別できず、痛みや苦しみが個のものとは考えられないという縁起の考え方には賛同できる。唯一神を崇める宗教では、他の宗教に対して寛容になれず、また自らの宗教に対しては妄信的になるので、争いを招きやすいのではないだろうか。それに対し縁起を説く仏教は排他的にはなりにくいと思う。

[H・W君]

私にとって聖なるものは、色々は宮殿や世界遺産の大自然などです。ヒンドゥー教徒にとっての牛はどんなに泥だらけで汚れていても清浄であり、神の使いとして崇められます。また、イスラームにとっての豚はどんなにきれいにされていても、不浄であり卑しいものとされます。

[D・T君]

人はどの宗教にも属さず、また信じることなく生きていけばよいと思っていた。しかし、それは違っていた。僕が考えていた宗教とは、「だれかの教え」であったのだ。それはいわゆる教義の宗教であり、広義の宗教ではないことを学んだ。広義の宗教は「聖なるものとの落差を意識した合目的的行為」と定義できるらしい。

寺院に足を踏み入れた時に信者でもないのに手を合わせたり、注連縄が巻いてある大木に小便をするのを止めたりする行為も宗教ということになる。またこのことは、人間が犬や猫と明らかに異なる点でもある。

【まとめ】

生徒が作成したレポートの内容から、講義を通じて「宗教」とまじめに向き合う姿勢が生じ、それにより、宗教に対する理解や批判精神が芽生えたことが読み取れ、本講座の目的であった「宗教的なものへの理由なき拒絶と無批判な没入という二極からの回避」はある程度達成できたのではないかと考える。

【注記】

- (1) 本稿は、拙稿「高等学校における宗教教育の実践例（一）四門出遊を題材にして」『石上善応教授古希記念論文集…仏教文化の基調と展開』第2巻、山喜房、2001。および、『日本仏教教育学研究』第19号～第23号に発表要旨として掲載された原稿を元に、一部加筆修正し、体裁を整えたものである。
- (2) 日本国憲法第20条第1項において、信教の自由が保障される一方で、日本国憲法第20条第3項、第4項及び第89条、旧教育基本法第9条第2項（現行法では第15条第2項）などによって、公の権力ないし財産と宗教的活動を分離し、教育の宗教的中立の必要性が規定されている。（〔相良：488〕以下参照。）
- (3) 教育基本法第9条第1項の規定を教育上実現することは、正しい意味における宗教教育であり、それはまた教育を受ける者に、宗教に関する知識を体得させ、宗教に対する理解を深め、宗教についての情操を豊かにするものであって、信教の自由をつちかうものとして尊重されるべきことを規定したものである。また、同法第2項で禁止されている宗教教育活動とは、特定の宗教の利益となるに足る動機と目的をもってなされるはたらきのすべてをいう。（前掲書同ページ参照。）さらに、文部事務次官通達（昭和24年10月 文初庶152）によれば、「各教科の教育目標に照らして、必要な場合には、各種の宗教の教祖、慣行、制度、宗教団体の物的施設、厚生および教育活動、種々の宗教史上の事件などに関する事実をふくんでもよい、これらの教育資料においては、特定の宗教的教理、慣行、制度、経験などを、価値がないものとして否認したり、あるいは特定のものを特に高く評価したりするような表現を用いてはならない（2のイ）」あるいは、「各種の宗教の教理、歴史、哲学心理も客観研究（比較研究あるいは特殊研究）を、新制高等学校における選択科目として設けてもよい、しかし特定の宗教のための宗教教育にならないように注意することが必要である（2のへ）」などとなっている。従って、この場合の宗教教育とは、「ある特定の宗教を絶対とする教育」あるいは「ある特定の宗教への信仰を強要する教育」と考えることができよう。

尚、上記の規定は国公立学校におけるものであり、私立学校については、禁止されていないと考えられる。しかし、私立学校において特定の宗教教育や行事を行う場合であっても、日本国憲法第20条により、学生・生徒・児童などの信教の自由は尊重されなければならない。

- (4) 宗教的情操を豊かにするための教育は、決して禁止されたわけではなく、旧教育基本法第9条第1項の趣旨であると考えられるが、実際の教育の現場では「排除」の方向に動いたと思われる。(本稿注記3参照)
- (5) 「聖なるもの」は、様々な宗教研究者によって育て上げられてきた概念である。ここでは、筆者が参照した著作の一部を参考としてあげておく。[オートー]、[エリアーデ]、[立川]などがそれである。
- (6) 現在、同校において、「宗教」の時間はカリキュラム編成上一次的に削除されているが、本稿で取り上げる実践例は本稿注記3の文部事務次官通達にあるように、「地歴」あるいは「公民」の時間で実践可能であると考ええる。
- (7) [佐藤正：7] 参照。
- (8) 本時限のアイデアは、[立川：1986] 立川武蔵氏の第一章の記述から学んだところが多く、氏に対し敬意と感謝を申し上げる。
- (9) 『JICAの新規円借款供与に関する2005.3.31のプレスリリース(6-a)』より抜粋
- (10) 『マハーバーラタ(3-104-108)』を訳し、要約した。
- (11) [佐藤幸：52] 以下参照。
- (12) [佐藤幸：86] 以下参照。
- (13) 「ハレ」と「ケ」あるいは「ケガレ」に関する研究者間における議論の隔たりは、解消されておらず、統一的な定義は打ち出されていないと考えるのが妥当である。また同様に、論者によって定義が異なる聖と俗という概念を、「ハレ」と「ケ」などと同時に議論する場合には、更なる注意を払う必要があるが、今回の実践はあくまでも高校生を対象にしたものであるため、そのような学術的な議論に深く踏み込むことなく授業を進めた。
- (14) 『佛本行集経』卷第十四(大正蔵第3卷719下以下)。
- (15) 『遊行経』(大正蔵第1卷21上)。『大般涅槃経』卷中(大正蔵第1卷199上)。『般泥洹経』卷下(大正蔵第1卷184下)。など
- (16) 暦との関係が介在する(暦が人々に与える影響などについては、本稿第3限の記述を参照)ので、単なる「日の出」と「初日の出」とを同様に論じることはできないが、ここでは、「初日の出」を「日の出」の象徴として捉えることにより、イメージがはっきりすると考えられる。
- (17) ここにあげた東西のイメージについては、解説をする前に生徒などに問いかけることも有効であろう。その場合も解説さるべきイメージと同様の答えが十分に期待できる。
- (18) 「日出処天子 致書日没処天子 無恙云云 帝覽之不悅 謂鴻臚卿曰 蛮夷書有無礼

- 者 勿復以聞」『隋書倭国伝』参照。
- (19) 無論アリア人侵入以前のインドにも、他の諸民族によって諸文化が発達していたことは確認されている。その中でも特に注目すべきは、インダス文明と呼ばれるものである。この文明の文字は未だ解読されていないので確かなことはわかっていないが、後世のインドの民間信仰に一部影響を与えているようであるが、アリア民族とは信仰を異にしていたようである。([中村:1997]第1編 第2章、あるいは、[中村:1968]第1章1参照)
- (20) [中村:1997]第1編第2章、あるいは、[中村:1968]第2章1参照。
- (21) [中村:1996-419]参照。尚、バイラヴァと呼ばれるこのシヴァの忿怒相は、後に独立の尊格として崇拝の対象となることもあった([立川:1987-56, 122, 140, 141]参照)。
- (22) 四方四維の八大守護神は、様々なインド思想に採用されており、「八方天」、「ローカパーラ」などと総称されている。各伝承により、各守護神の主宰する方向はまちまちでもあるが、死神ヤマが南方以外を主宰する伝承は見られない([中村:1996-434 註(1)]参照)。
- (23) Patañjali-Yogasūtra-bhāṣya-vivaraṇa, Madras Government Oriental Series Vol. 94, 1952, p.225-1.11 以下参照。
- (24) メール山はブラフマン、マンダラ山はヴィシュヌとラクシュミー、カイラーサ山はシヴァの、ヴェンディヤ山はウマーの住居等々である([中村:1996-408, 409, 419, 428]参照)。
- (25) 中村氏は、この時計回りの順は、ヴェーダの祭壇をバラモンが巡る方向と、あるいは、凱旋軍が城壁を巡る順と一致していると指摘されている。([中村:1992a-166]参照)
- (26) 本稿第2限で触れたように、宗教実践の局面では、我々が日常的に用いる、清潔・不潔という概念とはまったく異なる、浄・不浄という概念が存在する。例えば、ヒンドゥー教徒にとってのガンジス川を考えると、彼らにとってガンジス川は天に源を発し、インドの大地を潤し、再び天へ帰る聖なる川である。従ってその流れは、限りなく聖性が高く、その流れによって沐浴することにより、身体が清められると考えるのである(仮に、科学的に分析すれば、汚染されていようとも)。また、人の身体を例にとって見ると、天に近いほど聖性が高く(あるいは、清浄である)、地に近いほど聖性が低い(あるいは、不浄である)と考えるのが一般的である。例えば、宗教実践で一般に行われる礼拝は、自らの身体のうちで、最も清浄である頭を、礼拝の対象となる神や仏といった聖なる存在の最も聖性の低いと思われる箇所(すなわち、足)に近づける行為である。チベット仏教などで行われる「五体投地」の礼拝などはこの典型的な例である。さらに、私闘などで敗れた側が、「土下座(敗者が自らの最も清浄な箇所である頭を、勝者の最も不浄な箇所である足に近づける行為)」を強要されるのは、これが完全なる屈服の証となるからである。また、ある人物などから何かしら大恩などを受けた場合、「あちらの方へは足を向けて寝られない」、あるいは、ムスリムが就寝する場合、必ず

メッカの方向に頭を向けるなども同様の理由による。

- (27) 中村氏は、この点に関する実例として、①北枕はインドでは最上の横臥法である。②北には楽園があり、南は死や悪魔が支配しているという考え方がある。③ベナレスの寺院は北岸にのみ並んでいる。(以上要約)などを挙げている。([中村：1992b-266]参照)
- 尚、『遊行経』によれば、「使頭北首面向西方。所以然者吾法流布當久住北方。」として、頭北面西の理由として、仏法が北方より流布すべきであることが記されているが、これは北伝の大乗仏教を意識しての後世の加筆と思われる。(國譯一切経 阿含部七大東出版 P. 91 脚注 109 参照。)
- (28) [立川：1992-22] 参照。
- (29) [平木：2009-58] 参照。
- (30) プラヴァーハナ・ジャイヴァリ王の説く「五火二道説」。『チャンドーギヤ・ウパニシャッド (5-10-6,7)』他より、部分的に意識した。
- (31) 「瞑想型」と「祈り型」については、本稿第5限でふれている。
- (32) 一般に、前者はラージャ・ヨーガ、後者はハタ・ヨーガと呼ばれることが多い。
- (33) ヨーガの八階梯は、インド六派哲学の一派であるヨーガ学派の根本経典である Yoga-sūtra の第2章 29～55、および、第3章 1～8 にその記述がある。本稿における、ヨーガの解説は、Yoga-sūtra の当該箇所、およびその代表的な註である Yoga-bhāṣya、および複註の一つである Yoga-sūtra-bhāṣya-vivarāṇa などの文献の記述に基づいている。また、今回扱った箇所の拙訳は、『仏教論叢 第55号～第59号』（浄土宗、平成23年3月～平成27年3月）に掲載されている。
- (34) 牛乳を精製して順次に生ずる製品であり、乳・酪・酥・熟酥・醍醐の五つが一般的である。
- (35) この自在神への祈念は、ヨーガの修法としては、バイパス的なものであり、「祈り型」に分類され得るものとも考えられるが、本時においては、詳細には触れない。
- (36) マートラは、時間の単位。1 マートラは、一度目を閉じて、再び開くまでの時間と、説明されている。
- (37) 以下、涅槃会に際して配布した生徒向けの啓発プリントより抜粋。
- (38) 以下、成道会に際して配布した生徒向けの啓発プリントより抜粋。
- (39) ここでのキーワードは「連続性」であり、この点を解説する場合に、やや局面は異なるが例えば、「A君が家からコンビニによって、学校に行く」と事象を考える場合に、数学的には、家からA君が今いるコンビニまでの距離と、A君が今いるコンビニから学校までの距離を足せば、家から学校までの距離になるが、現実の世界においてA君が今いる点が本当に正しく特定できるかについて議論をしたり、「限りなく直線に近い曲線を直線とみなす」微分法などについて議論を深めることも有効である。
- (40) 悟りを得たのちは、悟りの境地に安住することは許されず、衆生の救済という実践が要求されるのである。この点は、大乗仏教においてより強調され、浄土教思想などに

においても還相回向という形で説かれている。また、菩薩思想においては、悟りを得るために、種々の誓願を立てその実践に専念することが要求される。

- (41) イスラームという言葉自体が宗教であることを意味しており、イスラーム教と呼ぶ必要はないとされる。
- (42) 往生以降の局面は、信仰心に関わる部分であり、本来は布教の場で説かれるべき内容であり、宗派教育を標榜しない教育の現場では、深く立ち入るべき内容ではないと考える。
- (43) ここでは、ディスカッションの後に生徒に書かせた感想文の抜粋の一部を紹介する。

〔参考文献〕

- 相良惟一（編集代表） 『学校六法全書』 研学社 昭和44
ルドルフ・オットー（久松英二訳） 『聖なるもの』 岩波文庫 2010
ミルチャ・エリアーデ（風間敏夫訳） 『聖と俗』 法政大学出版局 1969
立川武蔵 『「空」の構造』 レグルス文庫、1986
立川武蔵 『はじめてのインド哲学』 講談社現代新書、1992
佐藤正英他 『改訂版 高等学校 倫理』 数研出版、2008
佐藤幸治 『文化としての暦』 創言社、1999
中村元 『インド思想史第2版』 岩波全書 1968
中村元 『ゴータマ・ブッダⅠ』 中村元選集第11巻、1992a
中村元 『ゴータマ・ブッダⅡ』 中村元選集第11巻、1992b
中村元 『ヒンドゥー教と叙事詩』 中村元選集第30巻、1996
中村元 『インド史Ⅰ』 中村元選集第5巻 春秋社、1997
平木幸二郎他 『倫理』 東京書籍、2009

キーワード：宗教教育・情操・政教分離・仏教・縁起

（こんどう たつみ 東海中学・高等学校 副校長・宗教学監）